

柏倉九左工門の埋蔵金

柏倉九左工門家は、今の山形市柏倉から江戸時代の初め岡村に移住したと伝わっている。柏倉時代の菩提所は門伝の皆龍寺で、昔、九左工門家が寄進した本堂の欄間が、今も改築された皆龍寺に飾られている。

九左工門家は岡に移っていきなり大地主になったのではなかった。

寛文十一年(1671)は移住後十九年目に当たるが、その年の所有地は一町三反で、村内で十五番目である。それが元禄十四年(1701)には岡村内だけで田が三町四反、畑が一町八反と激増し、村外を加えればおそらくこの4〜5倍はあったろうという。

何故これほど土地を集積できたのであろうか？

岡の村には、こんな話も伝わっている「九左工門の主人は毎年のように4〜5日いなくなる。それは柏倉の山中に金を埋めてあって、大金が必要になるとそれを掘りにゆくらしい」というものである。

一方、大江町史によると、同町月布の大泉家には元禄ころ、岡村の柏倉九左工門に三百五十両貸したという記録がある。また、松橋村(河北町)の堀米家から借金した記録もある。

九左工門家に埋蔵金があったかどうかは判らない。けれども質素儉約を家訓とし、政治や商売は分家に行わせ、損をしても本家が傾かない制度をとり、貸金は確実に担保をとり、使用人と同じく働き、同じ食事をとり、日夜仏に感謝する姿勢が連綿と家運が継続した根源とつたえられている。